

説教学の基本的問題

説教が、いかにして神の言葉でありうるか、いかにして神の言葉になりうるか。この基本的問題を前に、定義する事だけでゆるされるか。第二章で見て来たような「言葉の喪失状況」が、「**信仰と愛と希望の言語論**」を要求している。厳密かもしれないが、一面的であるような方法論は、諸問題を解決しうるか。

第三章 予備的問題

「予備的問題」¹

- ① 説教、及び、説教するということを、我々は如何に定義すべきか。
- ② 説教することを、我々は如何に教えうるであろうか。
- ③ この説教論がどのような性質のものとならねばならないか。

第 I 節 説教の定義

(第一章で) 説教を奇跡と呼んだ。

奇跡としての説教とは、何を意味するのか。

ボーレン先生が取り除いたこと＝「最近の説教の定義、説教を学ぶことの定義の包括的な分析をなし、比較をなし、ひとつの説教論を書く。」この切除手術したのは、既に発表しているから。

- ① ルードルフ・ボーレン 「説教の定義について」(ヴィルヘルム・ダンテイーネ、クルト・リュッティ編『昨日と明日の間の神学、カールバルトの著作の解釈と、それへの問いかけ』(1968年、125頁以下所収)

¹ 暫定的に答えるものだから。重要でない、というのではなくて、その困難さから、「準備的行程」の中に組み入れることが適当と思われる。

- ② ボーレン「宗教改革と近代プロテスタント主義の説教の定義」、雑誌『福音主義神学』第31号、1971年、1頁以下。…ハインリヒ・ブリンガー²とエマヌエル・ヒルシュ³の定義の対比を試みたもの。

²1504-75.スイスの宗教改革者。ツヴィングリの後継者。スイス・ブレームガルテンに生まれる。ケルンで尋問が区を学び(19-)、エラスムに共鳴、教父・聖書を研究。ルター、メランヒトンをも読み、プロテスタントの信仰に傾く。大学卒業(20)語かっぺの修道院学校教師となり、説教師も兼ね、カトリック地方への伝道もする。ツヴィングリ、ユードを知り(23)、休暇をえてチューリッヒに滞在中(27)、ツヴィングリとの交わりを深め、彼に同伴してベルン論争に参加(28)。のち、父の任地ブレームガルテンの牧師に招かれる(29)。ツヴィングリの死後(31)、彼の地位を継ぎ、チューリッヒ大聖堂牧師となり、以後、牧会の仕事だけでなく、政治との交渉・学校改革・プロテスタント諸派の協調に尽力し、スイスに於ける宗教改革の確立につとめた。その間チューリッヒの歴史を書き、宗教改革に重要な文献を残す。1534年の論文ではツヴィングリの聖餐論をルターの解釈に近づけようと努力するが、ブーツァーの線までは行けず、スイスはヴィッテンベルク協定条約(36)に入らなかった。彼は同年バーゼルの会議で採用された第一スイス信条の一部の起草者。カルヴァンとの協調には成功しえ、ティグリス協約を達成(49)。ペスト流行(64-65)で妻と三人の娘を失い、自らも感染し、回復後も健康は不順となる。彼が書いた個人的な信仰告白書(66)は、プファルツ公フリードリヒ3世によって発表され、やがて第二スイス信条として認められ、フランス、スコットランド、ポーランドの改革派教会にも承認された。この信仰告白において彼は予定説でカルヴァンの見解に近づいている。聖書注解・説教・ルター派やアナバプティスト派に対する論叢・教理の解説など多くの著書を残した。困難なチューリッヒ教会の指導者として、ツヴィングリの伝統を生かしながら各派との協調につとめた彼の功績は、スイス・プロテスタントの指導権をカルヴァンに譲らなければならない事情にはあったが、決して小さいものではなかった。(キリスト教大事典より)

³エマニュエル・ヒルシュ 1888- ドイツのルター派神学者。ボン大学講師。ゲッティンゲン大学教会史教授(21)。同組織神学教授(35-45)を歴任。K.ホルの弟子。その著作は、聖書学・教理史・教義学など多方面にわたり、一般思想史との関連においてプロテスタント神学史を捉えている。特にルターとキールケゴールに関心を持ち、その研究家として著名。失明(45)後、キールケゴール全集を独訳。

- ③ もっと別の研究を、間もなく、別の機会に刊行したい。ヨーゼフ・ユングマン⁴及ミュハエル・ガッテラー、ヴィクトール・シユル、ヴァルター・ウーザデル、ヴェルナー・イエッター、オットー・ベッシュ、ヨハネス・シュライバーとの対話がなされている。
- ④ 説教の定義とその相対性の問題については、『実践神学ハンドブック』400頁以下所収のヨハネス・シュライバー執筆の説教の項目を参照のこと。

我々を取り巻く困惑の状況

⇒説教論の新しい企てが探究されなくてはならない。

ここでは、「様々な説教の定義との対話」を始めた頃の出発点を明らかにする。

説教の理解は、どこから得られるのか。何によって説教を理解するのか。

- 説教者を説教論の考察の対象とするのか。
しかし、説教するという人間の行為においては、**神の事柄が大切であるゆえに、説教行為の人間的側面にのみ還元していくことは、十分ではない**。こうした人間的側面からの説教論は、神学的本質からすれば、**危機を知らぬまま**。説教概念を一つに還元してしまうことに警告を発してきた。
- 現状から出発し、現状から自身を規定するような説教は、その力を失う。

説教について私が考えたことを、自分の体験によって規制できない。それは説教概念をあらかじめ狭めてしまう。体験によって方向づけられてしまったような説教理解が必然的に導く

⁴ ヨーゼフ・ユングマン (Josef Jungmann, 1773 年 7 月 16 日 – 1847 年 11 月 14 日) は、ボヘミア (現在のチェコ) の詩人・言語学者。チェコ国家復興運動第一人者でもあった。Wikipedia より。

のは、何ら新しいものは説教されない、福音の新しさが失われてしまい、説教がその更新の力を損ない、そこに現存するだけを確認することになってしまう。**現存するものから出発し、現象から説教を規定するような説教論が反映するのは、社会の中に完全にはまりこみ、状況の固定にのみに手を貸している教会であり、自分の力を失ってしまった説教。**革命的イデオロギーに適合し説教が革命的なことを語ったとしても、本当に新しいことは少しも言うことはできない。

● 説教は信仰に責任を持つ。

- 教会の革新をもたらした時代は、現存のものを無視しないが、原則的には、**現存のものから出発もしなかった。**我々の困惑の状況とは対照的。その宗教改革時代の古典的表現は、**改革期の先輩達の信仰を言い表している。**

- **説教が信仰問題として定義づけられている。**

☆ 説教論は、信仰を捨象⁵できない。説教する者は、不信仰に対抗して、**信仰を責任持って語る。説教そのものが信仰に責任がある。**説教が信仰を責任もって語ることで、不信仰を一つの危機に落とし込む。

- **この信仰に対して責任を持つことにおいて、説教は信仰の危機に陥る。??**

☆ 神学は、不信仰を困難なものと考えすぎるし、信仰をあまりに容易に扱いすぎる。しかし、不信仰の語りかけを聞き逃せば、説教、説教することを理解できない。

- 懐疑と不信仰を語る諸体験に、**信仰の告白をもって対決**することが正しい。

☆ 信仰の告白は、信仰の告白であるがゆえに、既に体験を出

⁵ 捨象〔名〕 物事の表象から、一つまたはいくつかの特徴を分けて取り出す抽象を行なう場合に、それ以外の特徴を捨て去ること。また、概念について抽象する場合、抽象すべき特性以外の特性を捨て去ること。抽象作用の否定的側面。

発点として、体験を目指す。歴史なくして信仰はあり得ない。

- 説教は、説教についての信仰の表白に直面して危機に陥る。説教についての困惑の状況が起こる。信仰が説教について言い表している事の中で、説教の困惑状況が鋭く現れる。

↓

宗教改革期の説教についての信仰告白

「神の言葉の説教は、即ち、神の言葉である」⁶（ヴィルヘルム・ニーゼル『信仰告白文集』1948年）

この定式をみ言葉に即して受け入れるならば、「空虚な言葉」に立ち返る道を、全て断ち切ってしまうことになる。説教という現象も、「こ

⁶ 以下文末注(20)から引用。

1566年に制定された第二スイス信条は、チューリッヒのブリンガーの起草による。この信条は、「聖書、真実の神の言葉について」の条項から始まる。その第四項ともいべき部分に、表題として記されたのが、ここに引用されている言葉である。本来、本文に属さず、寧ろ欄外に、その部分の要約の意味で記されたのか、たとえば、日本語訳の信条集（日本基督教協議会編、新教出版社、1957年刊行の「信条集・後編」、41頁以下に、国安敬二氏訳で掲載されている）では、この文章は欠けている。しかし、この命題は、「説教に関するブリンガーの定式」とされるものであって、説教の中心的主題を示すものと見なされる。尚、その部分の本文を拙訳（加藤先生訳）で掲げておく。[従って、今日、この神の言葉が、正当な手続きをもって召された説教者を通じて、教会の中において宣べ伝えられる時、神の言葉そのものが宣べ伝えられ、信じる者たちによって受け入れられていること、これ以外の神の言葉を勝手に作り出したり、天から期待すべきではないことを、我々は信じる。その時、我々の注目すべきは、そこで宣べ伝えられている神の言葉そのものであって、それを宣べ伝えている奉仕者ではない。宣べ伝える者が悪く、罪ある者であったとしても、言葉そのものは、そのことに関りなく、真実で善なる神の言葉であることに変わりはないからである]（以上ニーゼル編の信条集ラテン語本文による）。

の世の無意味さと沈黙の戦い」の中で、我々に行くべき方向を指示して助けを与えてくれることになる。



この宗教改革者の定式は、我々の背後ではなく、**我々の前途にある。**
これを目指して進んでいく。

この定義の支えとなっているもの

- ① 神の言葉としての聖書の理解
- ② 説教職が神によって立てられているということ
- ③ 聖霊の内的証明 (illuminatio interna) の教え

その後、聖霊論が展開されないままに、「聖書」と「職務」の両概念が一つの歴史を形成し、そのおかげで、我々はこの両概念（聖書と職務）を説教概念の支えとしにくくなった。



改革者の定式を受け入れたいのなら、①聖書正典、②職務、③内的照明について、どのように考えるかを明らかにしないといけない。



「説教が神の言葉である」の「e s t」(である)をどう理解するか。

この「e s t」が何を意味するかを言い得るならば、説教の奇跡を説明したこととなる。そのような説明は、言語喪失の状況を打破しないだろうが（説教そのものに於いて、この打破は起るのだから）、「言語喪失状況克服の備え」にはなりうる。

☆ 改革者たちのこの定式を、「将来の約束」として受け取る。**説教論と説教の行為をもって目指して進む将来こそ、この「e s t」。**

説教についてのこの時代にふさわしい定義は存在するのか。

☆ 今日が産んだ説教の定義は、改革者の信仰告白表現の含蓄の深さには到達していない。

☆ 説教の定義は、今日、不可能。

➤ 言葉は永遠であるばかりでなく、その本質において無限。こ

れを語るには、数えきれない仕方がある。定義は、許されざる抽象化、狹隘化の危険を内蔵。

- 改革者の定式の意味がそれを許さない。
- 奇跡は定義によって、予め、その通路が定められていることが許されないもの。奇跡は将来に満ちているものゆえに、その奇跡の持つ自由が尊ばれなくてはならない。

新約聖書そのものが二重の意味で説教の定義を阻んでいる。

- ① 新約聖書が知っている、宣教すること、語ることの可能性が豊かすぎる。三十以上の表現が、その多様性を示す。一方、我々の「説教」という愛念は、ひとつの収縮過程を示す。「我々が今日、全く排他的に、ただ『説教する』という言葉だけを知っている」ということは、ただ単に言葉が足りない、ということだけでなく、原始キリスト教においては生き生きとした現実であった多くのものが失われてしまっていることを示すしるしなのだ」(ゲアハルト・フリードリヒ 『新約聖書神学辞典』第三卷、702頁)。
- ② 新約聖書の用語法によれば、三十以上の表現のうち、名詞より動詞の方が多い。しかも名詞そのものも、「宣教の行動」を語るもの。
(『新約聖書神学辞典』第二卷727頁)。我々にとって大切なのは、説教を定義する事ではない。説教された説教、即ち説教するということだけが大切である！

説教されたキリスト教説教は、教義学的考察に於いても、説教学的考察においても、抽象化し得ない。「説教がなされる」と言う事実を教義学の中心的なものとみなすべき。

この説教の出来事の事実性、ということの故に、定義を拒否することが賢明。愛は必要の場合には定義しうる。しかし、愛の行為にとっては、愛を歌い上げることの方が最もふさわしい。それとの類比で言えば、我々は、説教学に概念規定ではなく、説教の行為にささげられたささやかな歌をもって、その序説とした。「非学問的であること」の方が、抽象化の中に自己を失ってしまう学問性よりも、ここでは事柄(説教)にふさわしい。

第Ⅱ節 説教論の方法について

A) 宗教改革者の定式から始めることが生む帰結。

- ① この説教論において、説教することとの関連で信仰を考察し、信仰との関連で説教を考察。

─ 説教についての最も含蓄ある発言が、信仰告白の中にある。



- ― 「説教されざる信仰」の事柄が明らかになる
- ― 忘れられた信仰諸命題が想起される
- ― 説教されざる聖書が注目される

説教論は教義学に近づく。が、説教は教義学を速記で書き記さねばならない。説教論なるがゆえに、説教するという行為に至る道程であるから。「腰に帯締め、足に靴はき、枕を手にする」！過越しを「不安に満ちて急ぎつつ」祝うイスラエルに似ている（出エ12：11）。

教義学に於いて語るのとは異なり、一つのテーマの包括的展開には重きを置かない。説教するという視点からのみこのテーマを取り上げ得る。

- ② この説教論は、経験を基盤として行われたい。

説教の危機は、究極的には、一つの「信仰の危機」の表現。信仰の危機は、経験的な諸学問の助けを借りるだけでは、手に負えるようなものではない。

- ③ この説教論では、説教する事は人間の業であることを強調する

多くの人々、「弁証法神学のおかげで宗教改革者の説教概念が新しく回復され、その結果、様々な仕方で経験が無視されるに至ったところに、説教の危機がある」、つまり、弁証法神学が説教することに、非現実的な香りを与えてしまった、という。神の言葉の神学に対するこの反応は、理解できるが、この批判は、神の言葉の神学そのものよりも、神の言葉の神学の誤用に対して。誤用の可能性は、神の言葉の神学の中にあり、避けられないもの。

経験を新しく尊ぶに至るような新しい手掛かりを求めざるを得ない。この説教論の全体的構成が示しているのは、**神の言葉の神学に依存する事を否定はしないが、説教することは人間のわざであることを強調する試みをしよう、**ということ。

B) 定義づけを拒否することによって生む方法論的帰結

説教論の可能性の多様性。

ただ一つの説教の種類があるのではなく、説教するには数知れぬ方法があるのだから、説教論は包括的で最後の、つまり規準を設定してしまうようなものではあり得ない。どのような説教も「**断片的性格**」を持つが故に、**更に尚、説教が続けられることを必要**とする。それと同じように、原則的にも实际的にも、他によって補足される必要がある、というのは、説教学の本質に属する。「補足の必要性」の故に、説教論はある程度の多様性と広がり求めて努力しなくてはならない。それをしなければ、説教者を隘路に追い込み、根本的には、ただ一つの説教の方法にのみ奉仕するということになる。

C) これまでの説教学の伝統から様々な手がかりを受け入れ、これと結び合わせることを試みる。

大きな刺激を受けた19世紀の先輩達。

● アレクサンダー・シュバイツァー⁷

1848「組織的に叙述された福音主義的・プロテスタント教会の説教学」の中で「理論そのものの学問的組織」を試みた。この説教学で、純粹に組織的な叙述の長所・短所が容易に明らか

⁷シュヴァイツァー 1808-88 スイスの改革派神学者。シュライエルマッハー学派の代表的指導者。ムルテンに生まれ、チューリッヒ大学助教授(1835)、同正教授(40)、グロスミュンスター教会副牧師、同牧師(40)を歴任。チューリッヒに滞在していたシュトラウスに期待したが、その<<信仰論>>依頼彼に失望し、シュライエルマッハーの神学に忠実な指導者となった。

に。彼が「身振り」のも問題に至るまで、実践的な感性ということを考えていた。にも拘らず、人々⁸はこの説教論を「説教する人間よりも説教学者に多くの意味を持つ」と非難した。

- クリスチャン・パルマー

「福音主義的説教学」実践と深く関り、例証によって具体化していく方法は注目に値する。学問的叙述の中で体験を積んだ説教者の勧告が無視されたままですませうるのは、その叙述が実践との関係を殆ど苦にしない時だけ。

- チャールズ・ハットン・スポルジョン⁹

⁸ アルフレート・クラウス『説教学教科書』(1883,111 ページ)、フリードリヒ・ヴィンツァー『体系としての説教学？アレクサンダー・シュヴァイツァーの説教学の意義とその特質』(雑誌『福音主義神学』25号、1965年 604 ページ以下)、『シュライエルマッハーから「弁証法神学」の台頭に至る説教学の基本的諸特質』(1969年、22 ページ以下)

⁹ スポルジョン 1834-92 イギリスのバプテスト派説教者。独立派の牧師の子であったが、バプテスト教会に転じ(1850)、ウォータールビーチに少年説教者として招かれ(52)、ロンドンの教会を経て、サウスワークの教会に転じた(54)。そこでの説教は聴衆に多大な感銘を与え、会員数は急激に増加して、会堂はたちまち狭くなり、新会堂を建てる必要に迫られた。彼は優れた説教者であったばかりでなく、神学校(56)、孤児院(67)を創設し、養老施設をも経営した。また、文筆活動をも盛んに行い<The Sword and Trowel>誌(剣とこて)を刊行した。彼は厳格なカルヴァン主義に立ち、しばしば論争し、自由主義的な聖書解釈に対する彼の強硬な反論によって、自分の教会を分裂させたほど。又、神学的な相違からバプテスト同盟と訣別した(87)。彼は生来雄弁であって、ユーモアもあり、特に時代の問題を論じる時には優れた良識を示したと言われる。主著：The Saint and his Saviour, 1857; Commenting and Commentaries 1876 その他多数。

『説教者のための勧告』(1896)。ヘルムート・ティーリケ『説教について、ス波尔ジョンとの出会い』(1961)、ペーター・シュパンゲンベルク「ス波尔ジョンにおける神学と信仰」(1969)

・本説教論が恩恵を被った先輩としては、上記三名だけでは十分ではない。



D)説教論は断片的

説教論はどうしても我流な仕事になる。これを避けようとするなら、一つのチームを作って説教論を書くしかない。神学諸学科の代表者だけでなく、言葉と社会に携わるすべての学問も加え、様々な研究者達が、一定時間以上、一緒に生活することが前提となるだろう。

しかし、そのような説教論と言えども、全てを包括するのはあり得ない。説教の断片的性格に対応するのが、説教論の断片的性格。説教論の適切な形態は、エッセー¹⁰。断片的性格は、生起する説教の多様性に対して開かれた態度を持つ、ということを強調。説教というのは、説教者と言葉とに自由を与えるように配慮すべき。そのように説教者は、説教が奇跡であることを保証。説教する自由を守ること、説教を作ること保証を与える。

ヴォルフガング・トゥリルハース¹¹

「説教論とは、み言葉に自由に仕えるための自由な教え」

¹⁰ エッセー ①随筆。自由な形式で書かれた、思索性を持つ散文。②試論、小論。

¹¹ヴォルフガング・トゥリルハースドイツのルター派神学者。 れーえんすブルクおよびエルランゲンで牧師をしてのち、エルランゲン、ハレ各大学で実践神学を教え、ゲッティンゲン大学実践神学教授(1946)、組織神学教授(54-)を歴任。新ルター主義の立場に立つ代表的実践神学者として知られる。

一つの説教学の構成・構造は、説教することの自由を配慮し、この自由の空間を指し示すものでなければならない。説教学の図式が説教することを、図式主義の中に狭めることは許されない。

第III節 この説教学の課題、構成、構造

A) 説教論の課題の素描

1) 説教学は、「信仰の言語論」

「言葉の喪失状況」VS 「父祖、改革者たちの信仰告白」

■ 説教論は、信仰が語りうるように助けを与え、これ（信仰）にみ言葉を理解するための指示（示唆）を与えることを試みる。

■ **説教論は、「信仰の言語論」**として把握しうるもの。

2) 説教学は「希望の言語論」

人間の言葉の喪失状況は、神の沈黙と切り離せない。

だが、信仰は、神の沈黙に対して、「それでも神は語られる」という約束に固執。

■ 説教者は、み言葉において神を捉え、神ご自身が再び語られるようにする。

■ 改革者たちが語った「である est」は、「なる werden」でもあるべき。

■ 我々は、「今語られる説教」の中で、神のみ言葉が約束（神の言葉の説教は、即ち神の言葉である）に従って行われる（神の言葉になる）ことを問いただす事で説教の準備をなし、この「なる」という神の御業に仕えようと試みる。説教する者は、神の将来を尋ね求める。

■ 説教学が説教の準備をする時、説教の中にある終末的なもの（das Eschaton）を問い、終末的なものが有する説教の意義を問う。説教学は、神が語られるということ、**神は今来たりつつあるお方であるが故に、語ることで神が来り、語られるのだ**、ということを目指して教える。■ **説教学は、希望の言語論**

3) 説教学は「愛の言語論」

神が沈黙され、言語喪失状況に沈んでいる人類は、愛を失っている。説教者をして、信仰と希望の言葉を語るべく助けようとする説教論は、そうする事で**神と人間に対する愛の学校**となる。

神の言葉の出来事は、「**神ご自身が人間に語ってくださる**」という出来事であるが故に、そこで語るべき方（神）を愛し、その言葉が向けられている人々（隣人）を愛するやり方しかありえない。

■説教学は、説教者のために、二つの愛の戒め（心を尽くし精神を尽くし思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい／隣人を自分のように愛しなさい）を解釈するもの以外ではない。最大の戒めは説教論に於いてこそ愛の戒め。

■この愛が希望に言葉を与え、言葉に力を与える。説教学を愛の戒めに入るための修練と理解すれば、説教学は自由の空間を開く。

■説教学は「**愛の言語論**」として理解されねばならない。一切の説教学は愛の中にこそ完成を見出す。ここでも、愛は「**律法の完成**」（ローマ13：10）。

だが、我々は二つの愛の戒めに対し罪を犯すものであり、それが続く必然性もある。我々が完全の状態の中で生き続けるなら、如何なる指示も必要ない。説教学は不要となる。

4) 説教学は、「キリスト者の言語論」

説教論を、信仰と希望と愛の言語論と把握すると、説教論をキリスト論的ではなく、聖霊論的に捉える事になる。それは極めて魅力的だが、賢明ではない。律法主義的になるか、律法主義的に誤解されるか、抽象化の中で自己を見失うか。神の祭司の民（万人祭司？）のための言語論が必要となるような将来には、信仰と希望と愛の言語論を企てることが出来るし素晴らしい事だろう。だが、現在、そのように試みれば、教会員すべてのための信仰と希望と愛の言語論の特殊形態でしかない。それほどまだ成熟していない、ってこと？

■説教論は、**キリスト者の言語論**。説教者を助け、会衆の言語教師となり、キリスト者をその言語喪失の牢獄から解放しうるようにし

てあげるべき。

B) 四つの道

第一に 説教の根拠を問う。

—説教の根拠、権利根拠、合法性を表現することを試みる

第二に 言葉の内容と形態を問う。

み言葉の持つ時間形式をとり上げ、説教行為の構造を明らかにすることで、言葉の内容と形態を問う。

第三に 説教者が自分の人格により、説教の出来事をどの程度規定するのか、問う。

■ 言葉の出来事には、語る人間が不可欠。

第四に 説教が向けられる者を問う。

■ 説教は常に誰かを目指して行われる。

人間の言語によって神の言葉が行われるということ、つまり、一人の人間がこの言葉を人間に対して語る語り手となる、という秘儀をこの四つの道で叙述しうる、と考える。

この四つの歩みは、常に同じ出来事について語る。説教の奇蹟を四つの側面から考察する。

C) 四つの局面が与える自由と不自由

👉の四つの局面は、説教者に自由を保証するか、自由を妨げるかのどちらか。不自由は、「一つの面が見過ごしにされたり、圧迫されたりする場合」か「一つの局面が絶対化されたり強調される場合」という二つの性格を持つ。

説教は、自分が何を根拠とする（第一の道）のか知らないなら、説教が語る内容（第二の道）について明確でないなら、語り手そのものが妨げとなっていたり、聴衆に対する語り手の関係が曖昧である場合（第三の道）にも、聞くという事（第四の道）をも考慮されていないならば、不自由となる。

D) 形式と内容

説教論が、人間が為しうることに限定するなら、人間が為しうることを無視する場合と等しく、奇蹟に対立してしまう。しかしまた、説教論が、「説教する」ことを、神の御業として描写する時、人間もそこで何をなしうるかを忘れられてはならない。

説教論が人間がなしうることに考察を加える時にも、本当は一切が「神が語られるということ」を保持すべき。

説教とは、神が「すべての物にあって、すべてとなられる」将来に向かって語られるもの（コリント I 15：28）。



説教の形式は人間的性格を持っている一方で、説教の内容は神の言葉であるがゆえに、神的性質を持つ。■ 形式と内容を区別する事は不可能。



説教が希望の言語に奉仕するならば、形式と内容の分離は避けて、相互浸透のために語るだろう。「すべての者において全てになる」という神の将来を期待しつつ、内容と形式の一致を求める。「何を」という問いと、「如何に」という問いへの分裂は、奇蹟と技術との弁証法的な相互浸透を破壊してしまう。説教は、一つの事柄に仕え、人間が為す事のできない、しかも、人間になしうることを表現するのだ、という事を無視している。

「何を」という問題と「いかに」という問題の分離は、許されざる単純化に導く。

—説教において、形式問題を拒否し、説教が「何を」語るかだけ問うのみならば、形式が使い古され内容に即応しなくなった時、説教は仮現的になってしまう。

—説教論が、何を宣べ伝えるかを無視して、弁論術的なものに身を向けるために内容を捨象してしまうなら、説教論は異質な律法のために内容を失う。

ただ神学的に、上から垂直に事柄を語る場合も、或いは、ただ人間の

語ることとしてのみ研究する場合にも、いずれの場合も、単純化していることになり、いずれの場合も内容が損なわれ、言語はその自由を失う。自由と共に力も失う。説教学において「何を」と「いかに」の問題を分離して論じるなら、宣教の内容は必然的に形態を見出さないので、内容としての宣教が言語を失ってしまうという危険が残る。或いは又形式が、内容を疎かにしてしまっ、空虚なままになってしまう。説教の無力とは、この関連で言えば、内容と形式との間の対応の欠如として規定することができる。

E) この説教論の構想と、A・シュヴァイツァーの構想との対比
シュヴァイツァーの構想

- ・「原理的な説教学（１）」⇔「特殊な説教学」
「内容的説教学（２）」
「形式的説教学（３）」

- ・（２）と（３）の間には統一があることを強調。

形式は素材から展開されるものだから「説教の素材が、説教による礼拝を定めた教会政治的秩序に従いながら、説教者の人格の中で、教化の目的に向かって動く時、この素材そのものから説教の形式が生じる」(第157節)。内容と形式は区別されるべきだが、分離することはできない。



まさしくここで我々の困惑が始まる。「内容的及び形式的説教学の区分が、実際の説教学者の意図に反して、やはり事実上、この二つの分離を生じさせるのではないか」

レオンハルト・フェント 「説教の神学と技術論」

「＜説教学＞の主要な要素は、説教論を＜弁論術一般からというのではないが＞弁論術の支配から解放することである」。最近の説教学との関連から、「最近の説教学は、先ず第一の事として、『聖書の宣教としての説教の内容を』論じ、それからやっと形式的なものを扱う。この形式的なものに弁論術は不可欠である」

→内容と形式のこのような関係規定は、満足を与えるものではなく、弁

論術が再び独立するに至った。